

2019. 11. 6 (水)

「モンティ・パイソン」とビブリオバトル

立石裕二

こんにちは。「科学・技術の社会学」と「リスクの社会学」という授業を担当しています。今日は、他者を通じて「異世界」と出会うこと、その窓口としての「本」についてお話ししたいと思います。

異世界としての「モンティ・パイソン」

私が中学生から大学生の頃に一番流行っていたのですが、DREAMS COME TRUE という音楽グループをご存じでしょうか？ 彼女たちが1993年に発表した曲に、「go for it!」があります。「がんばろう！」といった意味だそうです。今回、「出会い」というお題をいただいて、何を話そうかと考える中で、頭に浮かんできたのがこの曲でした。初めて聴いたのは中二か中三ぐらいの頃、おそらく兄が買ってきたシングルCDだったと思います。そのときは、あまり印象は強くなかったのですが、年を重ねるごとに、だんだんと好きになってきました。

歌詞では、主人公の女性が年上の男性と付き合い始めるのですが、その相手は何につけても自分よりも上手（うわて）で、また、自分にはどうも理解しがたい趣味を持っています。その部分を紹介すると、「ポイントはまるで違う2人 趣味どころの騒ぎじゃな

い」。続けて、その相手は黒が好きだが、自分は好きではないとか、相手が好きな「モンティ・パイソン」は好きではない、などと歌われています。

はじめてこの曲を聴いたときから、ずっと気になっていたのが、歌詞に出てくる「モンティ・パイソン」って何？ ということです。後のほうの歌詞では、「今夜あたり見直してみようかな あなたの好きなカラックスもジェリー・アンダースンも」とも歌っています。これらもまったく分かりません。当時はネット検索などという便利なものはありませんでした。

今は検索すれば一発なので、早速調べてみました。モンティ・パイソンはイギリスのテレビや映画で活躍したコメディ・グループだそうです。革新的なアイデアを次々と打ち出し、コメディの世界を大きく変えたということで、ほとんど伝説的な存在になっています。日本でも当時放送され、最近でもDVDや動画配信で見ることができます。その一方で、実際に見てみると中身はかなり過激で、シュールなもの、グロテスクなもの、強烈な風刺など、何でもありです。もちろん、その突き抜けた過激さと、よく練られた知的な面白さの両立が高く評価されているわけですが、好意を寄せる相手から「おもしろいよ」

と見せられても、正直リアクションに困るだろうな、という印象でした。

みなさんも、同じようなシチュエーションを体験したことはありませんか？ 仲のいい友達や恋人ができたとき、その相手が自分と同じ趣味を持っているということは、あまり多くないでしょう。そうすると、これまで全然美術館に行かなかった人がデートで初めて行くとか、ロックバンドのコンサートに一緒に行くといった場面が出てきます。それで本当に楽しめるかという、なかなか微妙でしょうが、そういう経験を通じて、自分の世界が広がっていくという側面もあるわけです。「go for it!」の歌詞の中で、一番好きなのところなのですが、「それぞれの引力が違えば広がっていく 世界はもっと」というフレーズがあります。自分のまわりにいるのが似たタイプの人ばかりなら、それはそれで快適でしょうが、世界が広がるきっかけにとぼしい、自分と違うタイプの人との「出会い」を通して世界が広がることは、刺激的だし、面白い。このことは、社会学を学ぶ意義にも関わっていると考えます。

社会学とビブリオバトル

「go for it!」の歌詞に出てくる男の人でいえば、モンティ・パイソンが自分だけの「世界」ということになります。他者がもつ多様な「世界」を知ること。共感にはできないまでも、その存在を認知し、受け容れること。こうした他者の「世界」を知るための視点や方法論を提供できる点にこそ、社会学の学びの大きな意義があると私は思っています。

「人を通して本を知る。本を通して人を知る」。これは、私がゼミなどで取り入れている

「ビブリオバトル」の理念として掲げられているフレーズです。ビブリオバトルとは、文献発表（ビブリオ）のなかに、競争（バトル）の要素を入れたもので、一人が一冊、5分間、レジュメなしで口頭のみというスタイルで、自分がオススメしたい本を紹介していきます。最後に、どの本を一番読みたくなったかを投票して「チャンプ本」を決めます。最近では、学校や公立図書館などでも実施されているので、ご存じの方もいるかもしれません。（興味をもった人は、谷口忠大『ビブリオバトル：本を知り人を知る書評ゲーム』（文藝春秋）をぜひ読んでみてください。）

ビブリオバトルでは、自分がオススメしたい本を自分で選びます。そのときに、どういふ本を発表したいと思うのか、自分の研究テーマについて、発表したいと思えるような本が見つかるかどうか。これらの点は、そのテーマで本当に卒論が書けるかどうかを考える際の、ひとつの判断材料になります。ビブリオバトルの準備をする中で、面白いと思える本に出会うまで本を探せるということは、漠然と「好き」だけでなく、手間と時間をかけてでも、もっと深めていきたいという熱意があるということです。ビブリオバトルという場で、その本の話をおの人にしたいということは、人に伝えるだけの価値（あるいは「問題」）をそこに感じているということです。そして、自分の興味関心とぴったり一致する本はめったにないので、良い本と巡り会うには、自分と少し違う意見にも耳を傾けられるオープンさや、関心の広がりも必要です。

ここでのポイントは、本の紹介という形をとることです。自分自身の体験談なら、話す

ほうとしても話しやすいですし、面と向かって反論されることもまずありません。ですが、本をオススメするとすると、そこからもう一段階ふみこんで、その本が描く「世界」に対して、自分なりの確信がないと話しづらくなります。しかも、単に独り言のように話すのではなく、(同じ趣味をもたない)相手にも面白さが伝わるよう、言語化することが求められるわけです。そのための思考や創意工夫は、そのまま社会的な問題関心を深めることにつながるとしています。

ビブリオバトルでは、一人が紹介するのは原則、一冊です。「ぜひみんなにも読んでもらいたい」と思う一冊を選んで、紹介してもらいます。自分の目の前にいる友人が本気でオススメしていることで、これまで知らない世界を覗いてみることに、新しい世界との出会いのきっかけになれば、という狙いです。ビブリオバトルのあとに、実際に学生どうしで、発表した本を見せてもらったり、貸し借りしているのを見るのは、うれしい光景です。

記憶が曖昧であることの避けがたさ

普段はゼミ生のビブリオバトルを見て、面白がっているだけですが、今日はせっかくの機会ですので、私も授業を離れてぜひオススメしたい本ということで、1冊紹介したいと思います(といっても、結局、授業とすこし関わりのある本になってしまったのですが)。

みなさん、子どものときに友だちとケンカをしたことがありますよね。小さい頃のケンカを思い出すと、誰と、いつ、どこでケンカしたのかは覚えているけれども、なぜケンカになったのかは、不思議と思い出せないとい

うことはありませんか?あるいは、口げんかをする中で、はじめは、自分のほうが正しいと自信满满で、「先に言い出した相手が悪い」と思っているのですが、相手から「そんなことは言ってない」と反論されると、だんだん自信がなくなってくる。それでも、その場では必死に言い返すけれども、次の日になると、ますます相手の言い分が正しいような気がしてきて、鮮やかだったはずの記憶まで次第にぼやけてくる…。こういった経験はないでしょうか。

記憶の曖昧さ、あるいは昔を振り返るときに入り込みがちなる、虚と実がない交ぜになったグレーゾーンの世界を鮮やかに描いているのが、今日紹介したい、カズオ・イシグロさんという小説家です。名前から推測できるように日系の英国人で、先年ノーベル文学賞を受賞されたので、ご存じの方もいるかもしれませんが、今日紹介するのは、『わたしを離さないで(Never Let Me Go)』という小説です。先ほど打樋先生に聞いたところによると、映画になっていたり、日本でドラマ化もされているそうで、そういう形で接した方もいるかもしれません。

イシグロさんの小説の特徴の一つとして、「記憶はねつ造する」、あるいは「信頼できない語り手」といわれる点があります。『わたしを離さないで』でも、語り手自身が、自信なさそうに回想したり、ひょっとしたらこうだったかも、と後になって訂正したりします。「信頼できない語り手」といっても、べつに相手をだましたり、自分に有利にしようと思って、ウソをついているわけではない、という点がポイントです。

イシグロさんの小説のもう一つのキーワードとして、「孤児」があります。一言でいえ

ば、自分の立ち返るところがない、なくなってしまう、という喪失感をずっと抱えながら生きている存在ということです。喪失の大きさを埋めようとすることで、虚と実の間に位置するような記憶が付け加えられ、ときに「記憶」どうしの食い違いや、「事実」との衝突が生じたりします。そして、子どものケンカでもそうですが、中立的な第三者がいるわけではないので、何が真実なのかについては、どこまで行っても曖昧な部分が残ります。こういう記憶の曖昧さと、曖昧であることの避けがたさについて丁寧に描いているのが、イシグロさんの小説で一番印象深いところですよ。

『わたしを離さないで』

『わたしを離さないで』の主人公たちも、ある意味でまさに「孤児」といえます。この本の主人公は、ヘールシャムという施設で育てられた「提供者」といわれる人たちです。その一人、キャシーという女性が語り手となって、ほかの提供者を介護し、「使命」をとげるのを見送りながら、施設で過ごした子どもの頃、青春時代を回想する、という話になっています。友達どうしで秘密の話をしたり、けんかをしたり、先生の目を盗んでいたずらをしたり…。そして、成長するにつれ、恋愛に目覚め、将来のことを思いめぐらすようになり、親友どうしの関係は徐々に変化していきます。一見すると、普通の青春もの、成長物語です。

しかし、「提供者」という言葉もそうですが、回想シーンの中にとときどき奇妙な場面が現れます。たとえば、授業の中で図画工作、とくに「創造的」な作品の製作に妙に力を入

れていること、毎週のように健康診断があること、施設の教師は「保護官」と呼ばれ、ときに教師たちのほうが子どもたちに怯えているように見えること…。どことなく違和感があるシーンが続く中で、徐々に、ヘールシャムという施設とそこで暮らす子どもたちが置かれた状況が見えてくるという、若干ミステリー仕立ての話になっています。

こういう本を紹介するときは、「ネタバレ」をどうするかが悩みの種になりがちです。ここまでの紹介で、勘のいい人は大体気づいているかもしれませんが、いずれにせよ、本書の比較的早い段階で、「真相」に近そうなことが、ある登場人物の口から語られます。ただ、それがどこまで真実なのかは、はっきりしません。本書で繰り返して出てくるフレーズですが、「教わっているようで、教わっていない」、つまり、自分の側では察しがついているけれども、きちんと話は聞いていない、という宙ぶらりん状態だということです。その意味で、主人公たちも読者も、同じような状況におかれながら話が進んでいくわけです。

本書の舞台設定には、科学技術や生命の倫理が問われる、ある問題が関わっているのですが、その技術がいいか悪いかといったような事は、最初から最後まで、声高には語られません。将来が見えないことへの不安、「自分は何者なのか」というルーツに対する問い、幼少時代への郷愁、大人へのあこがれと反発、といった普遍的な主題が、(この物語の舞台設定ゆえに、それぞれ特別な意味をもちつつ)描かれていきます。特別な運命を背負った主人公たちですが、実際に描かれているのは、それぞれに個性があって、とても魅力的で、生き生きとした登場人物たちです。

そうした主人公たちのストーリーがあって、そこに血の通った「世界」が感じられるからこそ、彼女たちの姿、失われたもの、初めから与えられなかったものを求める姿が胸を打ちます。多くの人に、ぜひ読んでもらいたい本です。

本を介して見える異世界

この本もそうですが、本を読むというのは、新しい世界との出会いだと思います。今では分からないことがあればネットで検索できますし、大学の学びでも、紙の本にこだわらない形での学習が多くなってきています。情報を得るだけなら、もっと効率的な方法があるわけです。それでも、時間と手間をかけて本を読むのは、本を読むことでしか得られない何かがあるからです。それは、今の自分にとっての「他者」「異世界」との出会いだと思います。ネットだと、すぐにアクセスできる分だけ、自分に合わないと思ったら、見切りをつけるのも早くなりがちです。モンティ・パイソンの動画をみて、「過激すぎて自分にはちょっと…」と思ったら、すぐに見るのを止めてしまいますよね。しかし、本とい

う形で手元にあれば、時間をおいてから見てみるとか、別のページを先に読んでみるとか、少しずつ時間をかけて、「異世界」に対して自分をなじませることができます。本が他から切り離された、一まとまりの世界を形作っているからこそ、こういう形でのアクセスができるわけです。

どういう本を読むかによって、読み手の人となりが見えてきます。自分でいい本を探すのも大事ですが、「本を通じて他の人と出会う」「他の人を通じて本と出会う」というのも、同じくらい大事なことだと思います。まわりの友だちがどんな本を読んでいるかを知って、面白そうだから自分も読んでみる。あるいは、自分が読んで面白かった本があれば、まわりの友だちに積極的に話してみる。こうして、本を間においた他者とのやりとりによって、自分の世界を広げるきっかけにすることが、現在、そしてこれからの本の役割として重要だと思います。みなさんも、ぜひほかの人にオススメしたいと思えるような本を見つけて、読んで、本の話をついでに話しましょう、ということで、今日の話を終わりにしたいと思います。

(社会学部教授)